トラークル研究

第二号

(トラークル協会創設 10 周年記念特集号)

2005 年 10 月

トラークル協会

〒271-8587　千葉県松戸市栄町西 2－870－1　日本大学松戸歯学部独語研究室気付
Tel/Fax 047－360－9308

シンポジウム「トラークルの詩における blau」の総括

（1）弟一期（～1909 年頃）

この時期はまだ blau の使用例は少なく、実際の色彩を示す例が多い。抽象的使用は一つ見られた（ins Bläue）が、これは慣用的用法であり、また Es blaut die Nacht. も雅語 Die Nacht war blau. の変容である。独創的な象徴的用法に関しては全く見られない。blau の動詞形（blauen, verblauen）はこの時期にのみ見られる。また他の形容詞との結合形（grünlich-blau, abendblau）の使用も見られ、一見多様と言えるが、それは形式面にとどまっている。その使用は現実的、常識的範囲を超えていない。blau に重みは置かれていず、未だこれがトラークルの色彩となっていないと言うことが出来る。

（2）第二期（１９０９年秋～１９１２年春）

blau に関する限りこの期も現実的な使用が卓越しており、それほど使用頻度も高くなく、またその使用方法、あるいはその様式の多様性は見られない。したがってこの色彩にまだそれほど特別な役割を担わせていないといえる。ただ目立つのは、Blau の占める割合の多さである。これに Bläue を加えれば形容詞の９例を上回り１０例に達する。これはこの時期に多い印象主義的な詩のメルクマールを示している。なお唯一非現実的な結び方をしている Gottes blaues Odem に今後の多彩な象徴的使用の萌芽が見られる。

（3）第三期（１９１２年夏～１９１３年春）

先ず blau の使用が一般的に多くなっていると言える。その極端な例として３０行からなる『Elis』には blau(Bläue)が５例も見られる。 またその使用も第二期に比べて多様、多彩になり、この色彩語がトラークルによって意識化され、トラークル独自な blau の使用が見られるようになった。現実的使用を並存させながら、第二期にみられた印象主義的な使用が影を潜め、非現実的、抽象的、象徴的使用が顕著になる。また初めて blau の共感覚的使用が見られる。この時期に限らないのであるが、稿体を見ると現実関係に囚われず、文脈の中で最も相応しいと思われる語が選択され自由に交換されている。blau もこのような関連においてその使用が多彩化されるようになったと言える。またこの時期、blau-Abend-Herbst という三位一体的構造の詩が見られるようになったことも重要な現象である。しかし最も重要なのは blau と Wild との結びつきである。この象徴的な結合は「青の詩人」としてのトラークルの誕生のメルクマールと言っても過言ではない。

（4）第四期（１９１３年夏～同年秋）

第三期以上に blau の使用の頻度が高くなり、その使用方法も更に多様、多彩になっている

ことが注目に値する。現実的結合としてはBlumeとの結びつきが顕著に見られることである。この背景にはノヴァーリスの文学の影響が考えられ、この点においても blau が様々な色彩語の中で特別な位置を占めたことを裏書している。次にこの時期に初めて見られたのは、メタファー的用法である（例えばblauer Flügel, blauer Höhle)。また眼に見えないものとの結合が増え、抽象的、象徴的用法も数が増し、かつ多様になる。それは例えば Augenblick のような時間概念との結びつき、更には Seele との結合である。特に後者の場合は、精神的なものとの結合になり、トラークルの達しえた色彩語の結合の窮極的なレベルの一つを示している。共感覚の技法に関しては、この期に初めて純然たる共感覚表現が見られた。したがってこの期を画する特徴的なメルクマールは blau と Seele との結合とこの純粋な共感覚表現と言える。その他すでに前の期に見られた類似的、擬似的共感覚表現も見られ、この点でも多様化されている。名詞化された blau（Blau, Bläue）については、その多くは抽象絵画に見られるような独立した自律的な色彩となっている。その上形容詞や名詞がそれらを潤色した形式が多くなっているのがこの期の用法の特徴をなしている。これも一つの発展的使用と言えるだろう。しかし第三期に４例あった意味深い blau と Wild との結び付きはこの期には全く影を潜め、第五、第六期に再び登場することになる。

（５）第五期（１９１３年末～１９１４年３月）

この期は最も期間が短いためか blau の用法の変化・発展は顕著ではない。共感覚の用法でも純然たるそれはほとんどない。ただ Bläue の用法の多様化と新しい用法として１例にすぎないが、blau が Finsternis と結び付く撞着的用法が目に付く程度である。第三期から見られる事実関係に囚われない形容詞、なかんずく blau の使用はこの期にも引き続いて見られる。

（６）第六期（１９１４年４月～同年秋）

この最終第六期にも、blau は多用され同時に多彩な使用の仕方がなされていると言える。第三期から始まった共感覚的使用を継承しているが、純然たる共感覚表現はほとんど見受けられない。しかし擬似的と言える共感覚表現は多様化され、感覚世界の敷衍化を見せている。第二期に始まった非現実的な結び付きも多様に発展させ、特に第三期に出現した ein blaues Wild を受け継ぎ、これが示す内実を深化させている。これは詩人自身を反映した人間の可能的存在として完全に人物のメタファーにまで高められている。したがってこの場合の blau はその使用の仕方の突出した例を示している。また、比較的その数は少ないのであるが、名詞 Blau（Bläue）も印象主義的使用から抽象的使用へと転化させ、更に blauern Schauern のような色彩と心的状態を結び付ける使用法はこの期が最も多いのが特徴となっている。もちろん最後期の詩の一つ『Grodek』の blauen Seen ように従来の現実的な使用に立ち戻っている例もあるし、他にも現実的な使用も並存している。この時期、他の色彩語にも言えることであるが、とりわけ blau の特質を生かした結びつきを創造し、その上それによって blau の有する潜在的可

能性をも開発している。シュナイダーはトラークルの色彩語は象徴的に使われている場合もそのリアルな面も失ってはいない、と言っているが、その使用の仕方がその色彩の有する特質から遊離していないからである。また非現実的な結合は眼に見えないものを視覚化し、感覚世界を拡張すると同時に純粋化、象徴化するのに大きく寄与している。blau の非現実的な、抽象的な使用は多彩になり、その象徴的な色価をもつ blau の数は多くなっている。しかしこの第六期においても blau を一定の色価で割り切ることはできない。割り切ればむしろこの色彩の使用の豊かさに眼を閉じてしまうことになりかねないからである。

まとめ

このシンポジウムは、通時的に、すなわちトラークルの詩作期間を六期に分けて時期順に詩において使用された色彩語を、トラークルにとって特別な意味を持つ blau に限定して追求したことは、その意味で画期的なことであった。このシンポジウムでは完全とは言えないが、一定の成果は見られたものと思われる。今まで様々な研究者が blau をはじめとするトラークルの詩における色彩語に一定の意味づけをしようとしてきたが、しかしこのシンポジウムの結果から明らかのように、各々の色彩語を一定の意味に限定することはできない。各時期において様々なスカラの使用例が見られ、最後期においても常套的使用例があり、限定できない。またトラークルの場合 blau は他の色彩語に比べて特別な位置を有し一般にポジティブな色価を持つとみなされがちであるが、ネガティブな使用例も見られる。これはネガティブになってもその結びつきが効果的であればそれに拘泥せず、その表現を使用するという詩人の手法の融通性に由来する。

しかし一般に期を追うごとに、特に第四期以降、次第に blau の非現実的、抽象的、象徴的使用が多くなり、多彩になっていくことは指摘できる。詩人はこの色彩語に限らないが、事実関係に囚われず、blau に様々な対象を結び付けることによってこの色彩語の持つ可能性を余すところなく発揮させえたと言える。更には blau を中心軸とした色彩語と並んでもう一方の感覚性の担い手である言葉の響きの効果的重用も相俟って、その感覚世界の拡大とその抽象的使用による詩の純粋化と象徴化をもたらした。第四、五、六期においては blau は頻繁に使用され、また次第にそれが象徴的に使用されることによってトラークルの詩世界にいわば瀰漫化したと言えるだろう。したがってトラークルが「青の詩人」と称されることは否定できない。

今後の課題は blau と他の色彩語の関係を追求し、また他の詩人の blau の使用法と比較することである。そうすれば更にトラークルのこの色彩語の特徴が浮き彫りにされるであろう。

特集

トラークル協会創設１０周年に寄せて

トラークルの詩と翻訳

伊藤　卓立

私のトラークルとの付き合いは、大学三年も終わりに近づいた昭和45年1月27日に、1967年に同学社から出版された、ノルベルト・ホルムート、栗崎　了、瀧田夏樹訳『対訳　トラークル詩集』を東横線沿線のとある古書店で購入した時から始まる。その春休みに『木村・相良独和辞典』と『相良大独和辞典』を片手に、対訳を参考に、原文を読んだ痕跡が、知らない単語の書き込みに今もはっきりと残っている。当時は、この素朴な読み方しかできなかったし、これで理解した、或いは、読んだと思いこんでいたのである。

その後大学院に進学し、研究者のまねごとをするようになると、専門の研究対象としていたのはリルケであったが、Nebenfachとしてトラークルに関するドイツ語圏の文献も収集し、同時にトラークル詩集の日本語訳を、目に付いた限り、買い求めてきた。現在、リルケやトラークルに対する興味はやや薄れてきたが、トラークルに関するドイツ語圏の文献は100枚のカードに整理されている。他方、日本語訳は次の6冊が手元に残った。

1）『対訳　トラークル詩集』（ノルベルト・ホルムート、栗崎　了、瀧田夏樹訳）、同学社、1967年、再版1985年。

2）『トラークル詩集』（平井俊夫訳）、筑摩書房、初版弟1刷1967年、初版第2刷1969年。（筑摩叢書100）

3）『トラークル詩集』（吉村博次訳）、彌生書房、1968年。（世界の詩51）

4）『トラークル詩集　原初への旅立ち』（畑　健彦訳）、国文社、1968年。

5）『トラークル全集』（中村朝子訳）、青土社、1987年。

6）『トラークル詩集』（瀧田夏樹訳）、小沢書店、1994年。（双書・20世紀の詩人）

一般に、ドイツ語を習いたての頃は、或いは、ドイツ語を知らなければ、先ず翻訳から入門せざるを得ないが、この歳になっても、ドイツ語は私にとって相変わらず難しい。そこで、ことあるごとに、これらの諸先輩の業績を参考にさせてもらっている。最近では2003年のトラークル協会の春の研究発表会で発表することになり、「Psalm」のO unser verlorenes Paradies を引用するために、上記のすべての翻訳を参照させて頂いた。

その際に気になったことがあった。それは、Es ist ein Heidekrug, den am Nachmittag ein Betrunker verläßt.のHeidekrugの訳語であった。吉村博次訳には「[Psalm]は収載されていないが、ノルベルト・ホルムート、栗崎　了、瀧田夏樹共同訳、及び、瀧田夏樹単独訳では「野

の居酒屋」と訳出され、畑　健彦訳では「荒地の居酒屋」と訳出され、中村朝子訳では「荒れ野に　居酒屋」と訳出されている。しかし、Heidekrugの訳語は平井俊夫訳では「巨大な酒壺」と訳出されている。Heideを「野」と訳出しようが、「荒地」と訳出しようが、一応は翻訳の許容範囲にあるが、「巨大な」という訳語は翻訳の許容範囲を逸脱し、「巨大な酒壺」という訳語はいささか異常であろう、と言わざるをえない。もちろん、異常な日本語だから即座に誤訳だ、一応翻訳の許容範囲だからもちろん正しい、などと言うつもりはないが、両者を比較すればその差異はあまりにも大きく、どちらか一方が「誤解・誤訳」を犯している可能性は高い。

大学院の博士課程でドイツに留学するまで二年半Jakob　SteinerのRilkes Duineser Elegienを一週間に一回共に読んでくださった藤村宏先生が、「翻訳は誰がやっても同じでしょう。僕は今までどれほど誤解・誤訳を重ねてきたことか」、と告白に近い言葉を漏らされたとき以来、私は、「藤村先生でさえあのような実感を抱くほどなのであるから、とても俺の実力では翻訳などできない、俺は絶対に翻訳はしないぞ」、と心に固く誓った。

縁があって私はここ十年ほどの間に160回以上お能を観、能楽関係の専門書を読み、研究のまねごとをしてきたが、翻訳ということに関して、パリ東洋文化研究所教授R.シフェールのおもしろい発言を『フランスで能楽を研究する意義』の中で読んだ。

> 英語系の人たちのために、また、その人たちによって作られた情報は、特に文学、美学に関する場合、ラテン文化系の一般民衆にうまく受け容れられず、ましてや解釈のされ方はひどいものです。・・・或る本なり、或る撮影中の台本なりの英語をフランス語にすると、必ずと言ってよいほど失敗に終わります。ところが仏語からスペイン語に、或いはポルトガル語に訳した場合、また、ルーマニア語にした場合でも、本質的なものを失うことなく、翻訳が可能なのです。

即ち、言葉を表現手段とする芸術作品の翻訳は、同じインド・ヨーロッパ語族の中でも、語派が異なれば、本質的なものを翻訳することは不可能である、とシフェールは言っているのであるが、「詩」というものは正に言語だけを表現手段とする「言語芸術作品」である。この観点に立てば、語派どころではなく、先ず語族が異なり、世界の中で孤立した言語である日本語にトラークルの詩を翻訳することは、「本質的なものを失うこと」を大前提としていることを、我々は銘記すべきであろう。

途上のカスパル・ハウザー ――― トラークル協会十周年に寄せる

植和田　光晴

「トラークル協会創設十周年」ということで、その「協会」へのお誘いを受けた頃、自分がトラークルとどのような関わりを持っていたのかを確かめておこうと手許の資料を調べていて、丁度そのころの論文「世紀転換期における、言語危機――ホーフマンスタールおよびリル

ケの場合」の抜き刷りが眼に留まった。これは職場の研究プロジェクトティームの論文集（「叢書」）の中の一篇として発表されたものであった（1）。その「叢書」の発行期日が一九九五年九月三十日となっていて、まさにこの小文の締切日の丁度十年前の仕事であった。つまり、この時には既に、少なくとも表面的には、トラークルは私の主要な関心の対象から外れていたのである。それならばと、さらに一昔の十年を遡ってみる。するとそこには紀要論文「G.トラークルの『カスパル・ハウザー＝リート』に関する考察――叙情詩における一構成要素としての人物像」（一九八五年十一月一日発行）があって、まさしくゲオルク・トラークルが私の真正面にいた。

『カスパル・ハウザー＝リート』*(Kasper Hauser Lied)* は、詩人の死の前年一九一三年十一月に書かれ、死の翌年発行された詩集『夢の中のゼバスティアン』に収載された一篇で、六連二〇詩行からなる。そして表題には詩人の知己アドルフ・ロースの妻ベッシーへの献辞が付されている。ここでは場所柄、これに立ち入ることは許されないが、要するに上記の拙論は、この詩の特異な表題を手がかりとして、ここでは、固有名を与えられた一つの人物＝像が、一旦フィクション構造の中で捉えられ、これがさらにこの構造をもひっくるめた全体として叙情化されていることを論証しようとしたものであった。（2）

W. キリーは、その周知のトラークル論で、この詩『カスパル・ハウザー＝リート』にきわめて重要な位置を与えている。そして、このハウザー像が史実から取られていることを確かめた上で、単に史実との関係づけに満足するようなこの詩の解釈はきわめて不十分である、この詩のハウザー像は、そのような史実の彼自身を超えて、さらに本源的な人間の、そして詩人の像（Figur）にまで届いているのだと主張している（3）。またもう一人のトラークル研究者R.ブラスは、この点に触れながら、キリーがトラークルのこの詩をフランスの詩人ヴェルレーヌの『ガスパール・ハウゼルが歌う』*(Gaspard Hauser chant)*（4）と関連づけているのに対して、――キリーが全く触れていない、さらにO.バージル、H.ヴァイクセルバウムのトラークルの伝記的研究にも出てこない――当代ドイツの人気作家J.ヴァッサーマンの作品が、この詩の成立に大いに関わっていることを強調している（5）。しかし上記の拙論では、キリーかそれともブラスかの問題には関わってはいない。当時筆者は、その態度表明の前提となるべき論拠を持たなかった。つまり、J.ヴァッサーマンの『カスパル・ハウザー』を読んでいなかったのである。

すでにその二年前の一九八三年に種村季弘氏の労作『謎のカスパール・ハウザー』（河出書房新社）が出ていた。これには「カスパール・ハウザー年譜」も付されていて、いうところの史実としてのハウザー事件についてはこの書から詳細な知識を得ることができた。しかし、当然ながら、それには小説家ヴァッサーマンあるいはその作品については、「参考文献」一覧の中に取り上げられている外には、言及されていない。ところが、種村氏の著書からさらに八年後の一九九一年に、当のハウザー＝事件に、アンスバッハ控訴院長として深く関わった刑法家A.v.フォイアーバハの著書の邦訳版『カスパー・ハウザー』（福武文庫）が出た。そして私は本書から、そしてそれに付された（作家中村　武氏による）「解説――カスパー・ハウザー受容史」から、思

いがけず本邦におけるヴァッサーマン受容史の一端を教示される幸運（これについてもここでは立ち入ることはできない）を恵まれたのであった。

そして、さて、トラークル協会発足の十周年にあたる二〇〇五年の現在、いや、この春の四月以降ずっと、私は、J．ヴァッサーマンの三八〇ページに及ぶ一大長編小説『カスパル・ハウザー　ある心の怠惰』(7)――記憶を辿れば、確か、私はこれを種村氏の『謎のカスパール・ハウザー』の出る一年前にミュンヒェンの書店で買い求めたのであった。――が仕事机の真ん中に、付箋をいっぱい突き出して、居座り続けている、つまり私はこれを日々蝸牛の歩みで読みすすめているのである。そして、読了までになお数ヶ月を要するであろう今日の時点で、わが国の受容史において、翻訳も満足になされないままに通俗小説として貶められいわば葬られてきたこの作品から、一つの確信を得つつある。つまり、トラークルのハウザー＝像に関して言うなら、これは、ヴェルレーヌの詩からというより、むしろこのヴァッサーマンの小説から、はるかに強くその成立の契機を得ていることの明証である。いまは私は、ヴァルター・キリーの見解へではなく、レギーネ・ブラスのそれのほうへと明らかに傾いている。

[註]

(1)『二つの世紀転換期における文学と社会』（産研叢書３）：大阪産業大学　産業研究所．1995.

(2)『大阪産業大学論集　人文科学編』（大学開学２０周年記念）、1985.

(3) Killy, Walther : *Über Georg Trakl.* 3., erweiterte Auflage, Göttingen 1967.

(4) 詩集『叡智』、1881.（『世界名詩集大成３　フランスⅡ』平凡社, 1952.「解説」による）

(5) Blass, Regine : *Die Dichtung Georg Trakls.* Von der Trivialsprache zum Kunstwerk. Berlin 1968.

(6) A.v. フォイエルバッハ(西村克彦訳)『カスパー・ハウザー』福武書店. 1991.(原著：Feuerbach, Anselm Ritter von : *Kaspar Hauser, Beispiel eines Verbrechens am Seelenleben des Menschen,* Ansbach bei I.M. Dollfuß 1832.)

(7) Wassermann, Jakob : Caspar Hauser oder Die Trägtheit des Herzens. München/Wien 1980.

私の好きなトラークルの詩『Verfall（滅び）』

梅崎　潜

この詩は、「Herbst（秋）」という題名で1909年に発表されましたが、1913年に出版された処女詩集に、数個の単語が置き換えられて「Verfall(滅び)」として収録されました。この極めて絵画的な美しいソネット形式の抒情詩には、トラークルの詩に特徴的なキーワード(秋、夕暮れ、滅び、死)が鏤められています。もう随分前のことですが、あるドイツ人の先生に、「この詩の前半の安らいだ雰囲気が、後半部で突然、暗鬱で幻想的な雰囲気に変貌する理由を想像するには、トラークルの生涯を全く知らない読者にとっては難しいと思いますが？」と尋ねたことがあります。先生は、「作者の実際の人生に囚われすぎると、作品の重要なファクターを見

逃すことがあります。もっと一字一句文法に注意して読んで見てください。第3節、1行目の『Da macht ein Hauch mich von Verfall erzittern.』という文は、少なくともドイツ語では奇異な文章です。ここでの衝撃は、認識ではなく、いぶき（Hauch）の衝撃なのです。Wer haucht aber hier?」と言われました。

ここで滅びの吐息をそっと吹きつけたのは、いったい誰なのでしょう？そんなことを考えながら、この詩を読み返してみると、また新たなトラークルが姿を現してくれるような気がします。

トラークル詩集との出会い

岸田　孝一

40年近く前、大学生だったわたしは、専攻の天体物理学にほとんど興味を失っていて、抽象絵画の制作と詩のようなものを書くことにほとんどの時間を費やしていた。そんなある日、美学美術史を学んでいた友人のひとりが、「Paul Kleeを卒論のテーマに選んだ。きみの第二外国語はドイツ語だったよね。どうせ暇をもてあましているのだから、僕のためにこれを日本語に訳してくれないか」と一冊の分厚い書物を手渡した。一年半ほどの時間をかけて「造形美術家の思考（Das bildnerische Denken）」と題されたその500ページほどの大著（Kleeのバウハウスでの講義録）を訳し終えたとき、当然のことながらわたしのドイツ語の読解力はかなり向上し、辞書を片手にいろいろな雑誌や本の類を読みこなせるようになったので、それまで翻訳で接していたドイツの小説や詩集を原語で読んでみようと考えた。

こうして購入した本のなかにInsel Verlag版のGesang des Abgeschiedenenが含まれていた。トラークルという詩人の名前は、フランツ・カフカが、年少の友人との対話の中で、その自殺について述べた「かれには幻想がありすぎたのです。だから幻想の巨大な欠乏から生じた戦争には耐え切れなかった」ということばで知っていた。わたし自身の第二次世界大戦の記憶のハイライトは、これまでに見たどんな花火よりも美しかった東京大空襲の夜空のイメージであり、それは幻想の欠乏というよりむしろ「幻想の過剰」とでも形容したほうが正確だと感じていたので、カフカの人物評を読んで、その詩人がどんな作品を書いたのだろうかという好奇心を抱いたのだった。

机の引き出しのなかからそのころに書かれた翻訳ノートを引っ張り出してみると、そこには、Sebastian im Traumほか何篇かの詩を日本語に訳そうとした試みの痕跡が残っている。いずれも未完成で、できあがっていたのはRondel一篇だけ：

流れちまったのは昼間の黄金（きん）
夕暮れの茶と青の色

羊飼いのやさしい笛がなくなった
夕暮れの青と茶の色
流れちまったのは昼間の黄金

これではまるで中原中也じゃないかと友人たちに冷やかされたことを覚えている。

トラークルへの関心はそのあたりまでで切れてしまった。もともとドイツ文学へのわたしの興味はもっぱら戦争体験とのかかわりにあったので、ボルヒェルト（戸口の外で）やベル(アダムよお前はどこにいた)そしてノサック（死神とのインタビュー）たちの作品により深い興味を惹かれた。しかし、若いわたしの心にもっとも深い感銘を残したのが、捕虜になったアメリカ兵としての空襲体験を下敷きにしたカート・ボォネガットの小説『母なる夜』だったのは一種の皮肉である。

いま、あらためて昔のノートに書きとめられていた訳詩の断片を眺めてみると、トラークルの詩にわたしが惹かれたのは、小さな薄青色のコトバの花びらのような断片的なフレーズの魅力だったように思われる。しかし、その意味では、ガザルと呼ばれるペルシャ古詩のスタイルを現代英語に移し変えようと努力したカシミール生まれの詩人 Agha Shahid Aliの作品のほうが魅力的に感じられる。かれの遺稿詩集の最後に収められた詩は次の通り：

If you leave who will prove that my cry existed?
Tell me what was I like before existed.

「わたしが存在する以前、わたしはどのようであったか？」というのは、いかにも詩人らしい問いかけとして、読む者の心に残る。

思いつくままに

三枝　紘一

本会は、そのメンバーは若干代わりましたが会員数においては、２０余名でほとんど変わらずに推移しています。当初は会員数が当然増えることを予想していましたが、残念ながら現状維持が精一杯のところです。理由は幾つか考えられます。先ず本会のＰＲ不足があります。一時は日本独文学会で会報等を配ったこともありましたし、また独文学会の名簿の巻末に本会が紹介されていますが、それらを見て入会された方は皆無です。最近入会された方はインターネットの「トラークル」のサイトを見て勧誘した方です。石橋道大さんの尽力により開設された本会のホームページにはまだ反応がありません。その他の理由としてはドイツ語教員の減少によって必然的に新たにトラークルの研究を目指す方が少なくなっていることにもよるでしょう。「ドイツ文学」には全国の大学の修士論文のタイトル

と執筆者が収載されていますが、最近あまりトラークルに関するものは見受けられません。そういう方があれば今まで必ず勧誘してきたのですが——。これから本会を維持していくためには、アクティブな会員の確保とともに新しい会員の入会が是非とも必要です。何年か前、ある短歌総合誌が「あなたの好きな海外の詩人は誰ですか」というアンケートの結果を公表していましたが、ドイツの詩人に限って言えば、ゲーテ、ハイネ、リルケ等はもちろん上位にランク付けされ、ツェラーンの名も下位にではありますが見えましたが、残念ながらヘルダーリンやトラークルの名はありませんでした。しかし最近インターネットの「好きな詩人・歌人・俳人・川柳作家のアンケート投票」というサイトを開きましたところ、欧米の詩人に限って言えば、ランボー、ハイネ、ゲーテ、ボートレールという順位で、次に票数は僅かではありますが、トラークルがシェークスピア、リルケ、ディキンソン、ヘッセ、マヤコフスキー、アレン・ギンズバーグと並んで５位を占めていました。これを見てトラークルの隠れた愛好者がいるということを実感しました。本会の目的の一つにトラークル文学の普及がありますので機会を捉えて一般にも更にＰＲする必要があると思います。

最近のトラークル研究の動向を見てみますと、何年かに一回世界各地で開かれていたトラークル・シンポジウムもここしばらくは開催されていないようです。またその研究の趨勢がトリビアリズムに陥っている感なきしもあらずで、ある意味では、これは研究の行き詰まりを示す兆候と言えるでしょう。インスブルック版の完結も遅れていて何時になるかも分からず、新しい資料も期待できない状況では無理からぬことと言えるかもしれません。しかしこのような状況を打開するためには、やはり研究の原点に立ち返ることが肝要と思われます。それはトラークルの作品の魅力の解剖です。これは他の詩人の作品との美学的な比較がその条件の主要な部分を占めることになるでしょう。これによってトラークルの詩史における位置付けがなされるわけです。

トラークルの文学は、一言で言えば、モデルニテートの美学とモラーリッシュなもの、勿論これは主にキリスト教的なものでありますが、この二つを融合させようと敢行して出来たものということができます。しかしある意味ではその二つはもともと質的に相反する世界であり、したがってそのために作品が調和的でなくなり、また難解になった部分もあります。一般にヨーロッパの現代詩は、モラル（特にキリスト教的）からの解放を出発点としています。トラークルの文学はそうしたモラルを引きずっており、純粋な現代詩のカテゴリーに入らないかもしれません。しかしそのモラーリッシュなものが、現代詩に見られがちな奔放なイメージの拡散を抑えて求心的に働いていることも事実です。そこがまた他の現代詩人には見られないトラークルの詩の魅力であり、美学的な面とモラーリッシュな面の兼ね合いの腑分けが今後の研究の一つの方向を示しているかもしれません。

トラークル没後１００年まで１０年を切りました。それまでに本会が更に何らかの寄与が出来ることを祈念して筆を擱きます。

トラークルとの出会い

高橋　喜郎

もう三十年になるだろうか。大学二年生の時のことである。あの頃は、青春という言葉の意味も分からず青春を生きていたような気がする。十三コマの授業のうちドイツ語と英語の原典購読以外の科目は、ドイツ語会話とリレー式のドイツ文学のみだった。

市村先生、三光先生、宮原先生、渡辺勝先生が、自分の専門分野とその周辺について、お話し下さった。どの先生の講義も大変に興味深かったが、宮原朗先生のヘルダーリンとトラークルの講義が最も印象に残った。ヘルダーリンのズゼッテとの道ならぬ恋と発狂。トラークルの妹との近親相姦と自殺。これらは、伝記研究の学徒であった私にとり、好個の素材であった。特にトラークルの講義では「パシオン」が取り上げられ、それは、私に強烈な印象を与えた。私には、トラークルが私と対極的な存在と感じられた。

今でもその感覚は間違っていなかったと思う。ムジルは、『特性のない男』の中で、妹との近親相姦をごく当たり前の生活とみなしている。トラークルにとって、近親相姦が、決して贖うことのできない罪であったのは、トラークルが素朴だが深い信仰を持っていたためであろう。脳天気な私にとって、トラークルの詩は息苦しくさえある。しかし、滅びへと傾斜していく詩のリズムと暗鬱さの中に凄惨な光芒を放つ色彩は、トラークル独自のものと思える。「カスパル・ハウザーの歌」のようにアレグロのリズムで書かれた例外といえる詩もあるが、最晩年の作品を除外すれば、アダージョのリズムで書かれたものに、傑作が多いように感じられる。私が最初に出会った「パシオン」も、ゆっくりとした速度で読むほうがより深く内容が伝わるように思われる。

『風の花嫁』とトラークル

西田　英樹

私の抒情詩の研究をふりかえるとき、色彩の面でとりわけ高い関心を寄せていたのは「青」でありました。ドイツ・ロマン派の象徴『青い花』の詩人ノヴァーリスはもとより、ゴットフリート・ベンの「青」の詩学—詩の発生学的考察—や、「青」は死者たちの旗の色、それも夭折した死者たちのそれ、とうたうツェラーン。これらの詩人たちにもまして、多くの詩作品に散見されるトラークルの「青」にはずいぶん魅惑されたものでした。

ところで、数年前、バーゼル美術館でココシュカの『風の花嫁』を観たとき、長年あれこれと思いめぐらしてきたトラークルの「夜のやさしい矢車菊の花束」にたとえられる「青」の本質に触れる思いがしました。霊気を帯びた濃い青を主調色とする黙示録風の画面中央には、嵐に翻弄される舟が描かれており、その中には肌も露わに水平状の姿勢で一組の男女が身を寄せ合っています。男は大きく目を見開いてカオスの空間を凝視し、女は目を閉

じて深い官能の喜びに身をゆだねています。よく観ると、ほかでもない、男性は、この絵の制作者オスカー・ココシュカそのひと。そして美しい寝顔を見せている女性は、大作曲家グスタフ・マーラーの未亡人アルマ。暗さにかくまわれた明るさとしての、この神秘的な青を背景に極光のように仄かに刺し込むバラ色と、冷ややかな白の線描の筆触がふしぎなハーモニーを成して巧みに溶け込んでいました。

1914年の春、第一次大戦が勃発する少し前にこの絵が完成したとき、ココシュカの子供を身ごもっていたアルマは結婚を決意し、新居の準備を始めていました。運命の女神がようやく彼に微笑み、ふるえるような春が彼の魂に舞い降りてきたかに思いました。ところが二人の仲を破局に導く事件が起こってしまう。アルマが前夫マーラーのデスマスクをこともあろうに新居に持ち込み、平然とそれを目立つ場所に飾ろうとしたのです。元来、虚栄心が強く、過去の名声を捨てきれない女と、嫉妬に狂う男とのすさまじい争いは、二人の間に決定的な亀裂を生み、アルマは、オスカーにとって愛の証し以外の何ものでもない子供を堕してしまいます。

だが、どれほどの苦汁にまみれた恋であっても、優しい想い出につながる時と場所があるもの。ココシュカの伝記によれば、この嵐の絵もふたりが恋に落ちた幸せな頃、連れ立ってナポリへ旅をした日のあることを想起しながら描いたようです。そしてその夜は恐ろしい嵐でした。

後日分かったことですが、この絵のタイトルは、制作中のココシュカを訪れたトラークルが、青ざめた手でこの絵を指し、「まるで風の中の花嫁のようだ」と言ったことに起因しているようです。10周年記念号発刊にあたり、お祝いかたがた、旅の思い出を一筆啓上させていただきました。

2004年度活動報告

1．6月5日（土）午前10時より12時迄春季総会及び研究発表会が北沢タウンホールにおいて開催される。

総会（1）本会の2003年度の決算が承認された。（別掲）

（2）「トラークル研究」について次のことが承認された。

1）体裁：従来の会報に準ずる。

2）内容：論文がメインであるが、研究発表のレジュメ、コラム、報告、書評等、また活動報告、決算報告、会員消息、編集後記等も従来通り掲載する。ただしこれらは紙幅の関係上及び誌の性質上圧縮する。研究発表のレジュメは原則として400字詰め原稿用紙一枚とする。

3）論文に関する査読制度：査読委員会を設置する。今秋の例会で査読委員

を選出する。

4）発行年月日と年度：印刷に付する時に決定する。

5）投稿する文章：フロッピーを添付する。

6）論文：日本語の論文の場合はドイツ語のタイトルを配する。出来れば Zusammenfassung を付ける。抜刷の費用は各自自己負担とする。

（3）本会創設十周年の記念事業の一つとしてヴァイクセルバウム著『Georg Trakl』の翻訳し出版する予定であったが、出版社の見積りが高額のため棚上げとなる。

（4）2004年度秋季例会は、10月2日(土)午前10時から12時迄、札幌の公共施設で開催の予定。

研究発表会

シンポジウム「トラークルの詩における blau」の補足と総括

伊藤卓立：トラークルの青とピカソの青の時代の比較

トラークル協会２００３年度決算報告 自２００３年４月１日至２００４年３月３１日			
収　入　の　部		支　出　の　部	
科　　目	金　　額	科　　目	金　　額
前年度繰越金	１３０６９６	会場費（南大塚社会教育会館）	１５００
本年度会費	３２０００	会場費（仙台ビジネスホテル）	４４１０
		会場費（北沢タウンホール）	１４００
		切手代	６３７０
		２００２年度会報印刷代	１５０００
		領収書用紙	１５７
		現金書留料・書留用紙	５３０
		本年度支出合計	２９３６７
		次年度へ繰越	１３３３２９
		（内、本年度剰余金	２６３３）
合　　計	１６２６９６		１６２６９６

2．7月30日（金）2004年度第一回幹事会が開催される。

秋季例会は諸般の事情のため中止が決定される。

3．10月1日（金）「トラークル研究」第一号が発行される。

4．2月28日(月)2004年度第二回幹事会が開催される。

編集後記

本号の刊行がだいぶ遅れて申し訳ございませんでした。お詫び申し上げます。と申しますのは、編集子の身辺が多事多難なためでした。プライベートなことは理由にはならないとは思いますが、どうぞ御容赦下さい。

さて本会はまがりなりも創設十周年を迎えました。そして毎年一回は研究発表会を催し、毎年会報あるいは研究報を欠かさず発行してきました。これはひとえに会員各位のご協力の賜物です。これからも更なるご協力をお願い申し上げます。

トラークル協会会員名簿

(2005年10月1日現在)

石橋　道大	
伊藤　卓立	
植和田光晴	
梅崎　潜	
鍛冶　哲郎	
岸田　孝一	
川添　悦男	
児玉　昭人	
三枝　紘一	
杉岡　幸徳	
高橋　明彦	
高橋　修	
高橋　喜郎	
筑和　正格	
中村　朝子	
西田　英樹	
松鵜　攻記	
三木　正之	
南谷　和伸	
宮原　朗	
両角　正司	